



標高が高く樹木が育たない厳しい自然環境かんきょうの中、テントを張って暮らす。

季節ごとに放牧地を変えるため、テントの中には必要最小限のものしかない。

そんなたくましい生き方に、強くひかれるものを感じたのだ。

3



「峠とうげを越えてこ」

1



2008年夏、インドのヒマラヤ山中のザンスカール地方をトレッキングした。

中心地は標高3,500mのパダム。そこから南下するルートをとった。

8日間、村々を歩いてつなぎ、標高5,600mの峠とうげを越える。当然、車が通れる道はない。

4



私は、ネパールや北インド、ブータン、チベットなどのヒマラヤ周辺の国々を訪ねては、その地域に住む人々の写真を撮影している。

特に、標高4,000mを超すような地域で、ヒツジやヤクなどを放牧して、乳やバター、チーズなどを作っている遊牧民みりようの生活に魅了されている。

2

## 峠を越えて



子供たちも、親の仕事を手伝ったり、遊んだりして過ごしていた。

私に気づくと子供たちが集まってきた。写真を撮るととても喜んでくれる。

インスタント写真を手渡すと、気が済んだのか、子供たちは帰っていった。

7



その峠の先に、遊牧民の夏村があるという。そこが今回の目的地だ。

歩き始めて4日間は、チベット仏教の僧院を訪ねながら、川沿いに点々と連なる村々をつないで歩く。

5



と思うと、二人の男の子が戻ってきた。そして、小さな手を私に突き出した。

手には小さな黄色い花が握られていた。「ありがとう」

思わず、日本語で答えて、笑顔を返した。

8



高低差はあまりなかったが、標高4,000mを越えると酸素が薄くなるため、疲れやすい。しかし、2~3日たつ頃には、身体も慣れてあまり疲れなくなった。

トレッキング3日め、午後3時頃、その日の宿泊予定の村に着いた。小さな村だが、人々が小川で洗濯をしたり、織物を織ったりしていた。

6



人々は、道端<sup>みちばた</sup>の畑からグリーンピースのさやをもぎ取り、その場でさやをむき、そのまま生で食べる。

とてもジューシーで、ほんのりと甘<sup>あま</sup>くまるで果物のようだ。この人たちにとっては、まさにおやつなのだ。

11



すると、別の男の子が、同じように花を持った小さな手を差し出す。それを見た最初の男の子が、再び花を取りに走り、また花をくれる。

そんなことを数回繰り返した。

言葉は全く通じなかったが、私の心をほっこりさせるできごとだった。

9



子供たちは、洗濯<sup>せんたく</sup>をしたり、さらに我々のテントの設営まで手伝ってくれたり、本当によく働く。

12



次の村でも、私は歓待<sup>かんたい</sup>を受けた。私を見つけた10歳<sup>さい</sup>くらいの女の子が畑から摘<sup>つ</sup>んできてくれたのは、グリーンピース。

標高が高くても育つ、大麦、ジャガイモ、グリーンピースは、貴重な食料だ。

10

## 峠を越えて



村を出てすぐに川の支流に入る。

ガレ場の急登を登り続けて、高度を稼ぐ。  
 けっこうきつい坂で疲れはしたが、ばてること  
 なく登りきった。高度順応がうまくいって  
 いるようだ。

ガレ場…岩や石が積み重なった場所

15



その合間に地面を転げ回って遊び、そして  
 また働く。

何をしていても楽しそうだ。

13



尾根に出ればしばらく登ると、今まで数日間  
 歩いてきた村々を一望に見渡せる場所に出  
 た。すばらしい眺めだった。

16



翌朝、いよいよ峠越えのスタートだ。川沿い  
 の道を離れ、急登を登り、標高4,000mから  
 5,000mまで一気に高度を上げる。そこで一泊  
 して、高度順応を図り、次の日に5,600mの峠  
 を越える予定だ。

急登…急な登り坂。急斜面。

14



ごろりと草地に横になる。  
目の前に、高度5,000mの空が広がっている。  
とても深い青。まさに「紺碧こんぺきの空」だ。  
「ここは、そのまま宇宙につながっている……。」  
自分の小ささを感じながら、こんなことを考えた。  
明日はいよいよ、峠とうげ越えだ。

19



大地の赤と茶に、村の緑に、空の青、雲の白…。  
さまざまな色が織りなすU字谷。  
つか疲れを忘れて、しばし見入った。

U字谷…氷河によって「U」字状に削けずられてできた谷。

17



翌朝、キャンプ地をスタート。  
谷に沿って緩やかな登りを進んだ。遠くに峠とうげが見えてきた。  
「楽勝じゃないか。」  
その時は、そう感じた。  
しかし、そこからが長かった。なかなか峠とうげが近くにならない。歩くスピードが落ちてきたのだ。

20



その後も徐々に高度を上げ、昼過ぎにキャンプ地とうちやくに到着。  
心地よい疲れ。体調はいい。  
川に下り、冷たい水をごくりと飲む。  
「おいしい！」  
その味は格別だった。

18



そうしているうちに、雪が降ってきた。  
 真夏の雪！  
 さすがに標高5,600mだ。  
 休むのもほどほどに、先に進むことにする。  
 峠を下り始めると、雪は冷たい雨に変わった。  
 雨具をつけたが、体の芯まで寒さがしみ透るようだ。

23

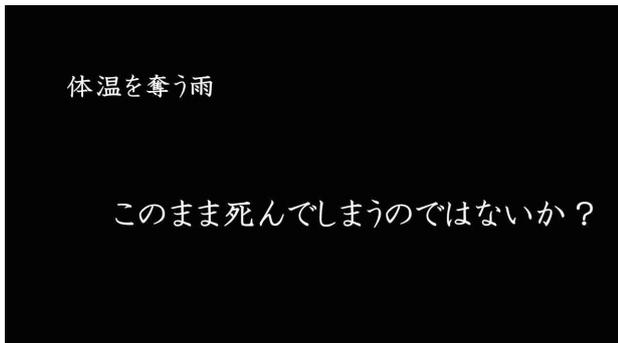


五歩、歩く  
 息が切れる  
 休む  
 息が整う

五歩、歩く  
 息が切れる  
 休む  
 息が整う

最後はやや急な登りになった。この頃には、  
 足が前に出なくなっていた。一步一步が重い。  
 ゆっくり歩いているのに、全力疾走をしたか  
 のように息が荒くなる。標高5,000mでは酸素  
 は平地の半分しかない。全身が酸素を欲し  
 ていた。5歩歩くと、息が切れる。休む。息が整  
 う。5歩歩くと、息が切れる。休む…を繰り返  
 し、ようやく、峠にたどり着いた。

21



体温を奪う雨  
 このまま死んでしまうのではないか？

体温を奪う雨。  
 ここで倒れたら……  
 「このまま死んでしまうのではないか？」  
 この時、私は本気でこんなことを考えてい  
 いた。

24



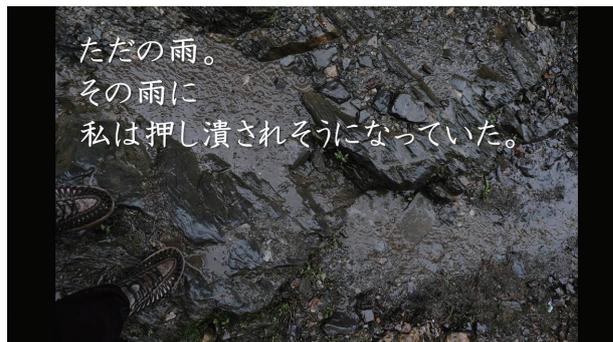
峠は、雲に覆われていて、眺望はきかない。  
 写真を撮るが、力が湧いてこない。昼食を  
 食べようとしても、食欲が湧かない。飲み物だ  
 けをのどに流し込んだ。

22



翌日、遊牧民のテントを訪れた。  
女性たちがヤクの放牧をしていた。

27



ただの雨。  
その雨に  
私は押し潰されそうになっていた。

ただの雨。  
しかしその雨に、私は押し潰されそうに  
なっていた。  
ただの雨の前に、私は無力だった。  
寒さに震え、恐怖を感じながら、私は足下だ  
けを見て、半ば走るように峠を下った。

25



テントに入れてもらい、お茶をいただく。  
体が温まる。  
電気などない。木も生えていないので、燃料  
はヤクの糞を乾燥させたものを使っている。

28



広い谷間に出た。今日のキャンプ予定地  
あり、この旅の目的地でもある、遊牧民の夏の  
放牧地だ。  
しかし、この時は、テントを張って、着替え  
をすることしか頭になかった。  
テントの中で雨をしのぎ、着替えをすると、  
体に温かさが戻り、やっと一息ついた。

26

大粒の夕立

不安は感じなかった

数日後、帰国した。

午後5時。

おおつぶ  
大粒の夕立が降り始めた。

しかし、不安は感じなかった…。

31



ヤクを育て、乳をとり、チーズやバターを作る。

昨日、私に死を感じさせた雨も、この人たちにとっては、恵みの雨めぐだったのだろう。

29



峠を越えて

32



自分たちを自然の一部として  
自然とともに生きている

「この人たちは、自分たちを自然の一部として、自然とともに生きている。」

そう感じた。

この美しくも厳しい自然の中で、つつましやかにたくましく、そして、明るく生きている。

30

(文・写真 小貝 宏)